読売歌壇

小池　光　選

家中に赤子の泣き声響きたり令和七年めでたき年始　つくば市　岩瀬　悦子

【評】一族で集まるお正月。孫か曽孫か、突然大声で泣き出した。赤子の泣き声というものはパワーと魅力がある。これ以上のお正月の喜びはない。まさに新年おめでとう。

ちょっとだけ胸がおどるよポスト開け手書きの封書見つけたるとき　横浜市　桃井　恒和

【評】郵便物もぐっと少なくなった昨今だが、来てもみな印刷された宛て名ばかり。手書きの宛て名はめずらしい。誰からだろう、何が書いてあるのだろう。ひとときときめく。

母逝きて三年いまだ開けられぬ母が残しし小さき手帳　和歌山県　助野貴美子

【評】故人の書き残したものを読むのは重いことである。まして母の日記。手元にあるが開けない。その心境、とてもよくわかる。

眼前の山の峡より天空へ豪然と虹の柱立ちたる　吹田市　鈴木　基充

勉強についていけずにつらかった中学時代詩を書いてたよ　鳴門市　楠井　花乃

道子ちゃん？昭雄ちゃん？などと確認し同窓会は始まってゆく　匝瑳市　椎名　昭雄

こない人二枚くる人それぞれの背景おもう賀状の束に　芦屋市　中島富美子

五十年前被せた銀がひび割れて俺より先に逝くな奥歯よ　東京都　岩本　朗

冬の日のそぞろ歩きにふと気付くいと美しき裸木の枝ぶり　東京都　杉中　元敏

夫の亡きわれはひとりで残る生の今日を生きむと飯をいただく　北九州市　田浦チサ子

栗木　京子　選

紅色の見頃は過ぎし山茶花が日の出まぢかの庭で艶めく　茨城県　石橋　里子

【評】闇と光が混在する日の出間近の空間。そこには現実とは少し違う世界が広がっているのかもしれない。艶めく山茶花は最後の紅色を放っているのだろうか。印象鮮明な歌。

巳年生れ蛇が苦手という夫よ私はあなたのカエルでナメクジ　宮崎市　長友　育代

【評】蛇はナメクジを恐れ、ナメクジはカエルを恐れ、カエルは蛇を恐れる。三竦みの関係が夫婦の間に存在する。作者がカエルとナメクジを兼任しているのが楽しい。

風と来るポピンズ私も乗せてって怪我より六年足ままならぬ　三条市　矢田　園

【評】傘をさしながら風に乗るメリー・ポピンズ。ディズニー映画の主人公である。「乗せてって」に切実な願いがこもる。

瀬戸内のメバルいただき甘辛く煮て煮こごりも大事に食べる　枚方市　小川　洋子

白亜紀の海底の深さを一歩ずつ想像しながら高尾を登る　相模原市　榎本　ハナ

ドリップの最後の一滴まつ間気象予報士今日の雨告ぐ　さいたま市　柳館多恵子

勤めこし三十八年早送りす教へ子よりの賀状読みつつ　上越市　太田　空賢

注文の電話受けたりカタカナのマンション名を再度たしかむ　木津川市　鳥居キクノ

お互いに目薬さすの下手だねと笑い合う日の永くと願う　筑後市　平　昌恵

冬の間は旅に出ないで旅をする卓にコーヒー、時刻表など　会津若松市　佐藤　秀子

俵　万智　選

たくさんの手紙をくれた母がいてたった一回泣いてくれた父　つくば市　小林　浦波

【評】母は日常的にたくさん、父は人生の大きな場面で一回。実に対照的だが、決して逆ではない。どちらも、それぞれの方法で愛情を表現してくれたのである。

お年玉の中身がお金ということを知って興味をなくす四歳　大和郡山市　本田　岳

【評】お金、かたなしである。遊べないし、食べられないし。笑いを誘われつつ、生き物としての子どもの直感は鋭いとも思う。

ドラム式の洗濯槽に腕ふかく入れて確かむ奇数のわけを　東京都　富見井高志

【評】靴下が足りなかったのだろう。洗濯槽に貼りついている片方を探している場面だが「奇数のわけ」という表現が面白い。日常のこんなところにも、歌の種は潜んでいる。

表札の吾が名の上に冬蛾ゐて動かざりけり温いか吾は　青梅市　諸井　末男

恒例の賀状来ぬ人三人いて八十路の春は心和まず　越谷市　藤谷　明

口ひげはもう剃らないって決めたんだくすぐったいってきみが笑うから　フランス　小仲　翠太

「この店で一番甘いみかんです」他のみかんに聞こえぬように　名古屋市　山本　望

夏を耐へ冬を耐へ来し杉のあかねの空に素描を顕たす　市原市　井原　茂明

静止画になるわれ、カレー皿をいま摑みて放る二歳のゴジラ　新宮市　小野小乃々

とりどりの夢を預かり絵馬の字はたてがみのごと風に揺れゐる　千葉市　小金森まき

黒瀬　珂瀾　選

復員の春よりはじまる農日誌表に太く「不退転」とあり　大津市　井上　智子

【評】戦地から帰ってきたご家族が残した日誌。そこには、農家として新たに生き直そうという決意が満ちていた。多くの人たちがこうして戦後を出発していったのでしょう。

未練とは呼ばれたくない薔薇の蔓のしっぽが小指にからむ　埼玉県　鈴木えみ子

【評】後ろ髪引かれる思いがありつつ、人からは未練と思われたくない。そういう場面は人生に多々あります。薔薇に触れつつ、自分の心に踏ん切りをつけるのでしょうか。

ドタキャンの君より夜に届きたるごめんなさいの海老のスタンプ　小諸市　藤　雪陽

【評】約束を破った「君」が夜になってやっと詫びてくる。それも、憎めないキャラのスタンプで。「ドタキャンの君」の表現が秀逸。

老妻と日向ぼこして長あくび待てども待てども子等は来たらず　尾張旭市　小野　薫

イケメンのスタバの君に見惚れゐて予定のバスは通り過ぎけり　木津川市　島野　秀子

薫りたつ七種の草をのせて焼く昼餉のピッツァに集まる笑顔　熊本市　森山　昭子

はだか木もわずか春めき山あいの寒風いとわぬ強さを吾に　淡路市　河合　律子

ただいまとBoTに届く孫の声お帰りなさいBoTに入れる　薩摩川内市　末永　芳子

元朝のパートを終へてその足で氏神詣でわれの決め事　横浜市　森崎　貞夫

マゼンタを切らして少し顔色の悪い会議の資料を配る　札幌市　住吉和歌子

◇投稿規定◇　はがき１枚に未発表の１作品。住所、氏名（ふりがな）、電話番号を明記。◇他の媒体、選者への二重投稿は厳禁です。選者が添削することもあります。〒103・8601、にほんばし蔵前郵便局留、読売歌（俳）壇、○○先生（希望選者名）係または読売新聞オンラインから　◇毎週月曜日に掲載　右の影絵はうめ